

## 黒毛和種繁殖経営における飼養規模、所得額および 子牛生産原価関連要因の Trend について

紙 屋 茂

(第42回西日本畜産学会講演要旨) 1991. 10. 30. 長崎厚生年金会館

**目 的**：日本食肉消費総合センターの調査結果によると、近年の牛肉に対する消費者のニーズは霜降り嗜好が減少傾向にあるのに対して赤肉嗜好は増加傾向にある。しかし、国産牛肉に対する嗜好は80%から更に高まりつつある。つまり、消費者の声は安全な牛肉をより安く欲しいということである。

肥育農家での肉牛生産費では素牛費の割合が最も高く、繁殖農家では素牛生産費を低くすることが重要であることはこれまでに叫ばれてきた点である。その場合、繁殖農家の所得が拡大出来る方法によるべきことは言うまでもない。

本研究では鹿児島県の5頭以上の飼養規模の繁殖農家の経営実態から、飼養規模、所得額および子牛生産原価と諸要因との関係を明らかにし、繁殖農家の所得拡大と子牛の生産費低減の指針を明らかにしようとしたものである。

**材料と方法**：鹿児島県畜産会は平成2年度に25戸の繁殖農家の経営診断を行なった。本研究では、この診断表の中で分析項目に欠測値がない24戸の調査データを選定した。

**結 果**：繁殖牛飼養頭数の増加により畜産所得額は増加した。その原因は飼養頭数の増加が家畜、建物施設および機械器具の償却費を低減させ、1頭当りの管理時間や飼料栽培時間の減少により労働費を低減させたためである。このため飼養頭数の増加は労働費を含む子牛1頭当り生産原価を低下させる傾向を示した。一方、飼養頭数の増加は繁殖牛や子牛の濃厚飼料使用量の増加をまねく傾向を示した。産次数の増加、分娩間隔の短縮、子牛の濃厚飼料利用量の増加および日齢体重の増加は畜産所得額を高める傾向を示した。しかし、飼養頭数の増加は労働費を除く子牛生産原価を高める傾向を示した。その直接的な原因は子牛の濃厚飼料費、粗飼料費および種付け料の増加によるものであった。耕地面積の増加は子牛生産原価を低減させる傾向を示した。このため、経営実態に合致したサイレージの省力的貯蔵・給与体系の確立が必要であると考えられた。また育成牛比率が高い場合には畜産所得額は少ない傾向が見られた。